

●グローバル化時代の医療・検査事情

## 元・大使館付医務官の独り言 第六話「ペルーで高山病に苦しむ」の巻

よし だ さだ のぶ  
吉 田 定 信  
Sadanobu YOSHIDA

「助けに行こう」と筆者は領事に言った。2003年2月、筆者は米国フロリダ州のマイアミから南米ペルーの首都リマへ転勤した。初任地ナイジェリアから数えて5カ所目の任地である。マイアミでは潜函病の患者を診ていたのに、次は高山病か。人事異動の偶然とは面白いものだ。ペルーといえば、反政府ゲリラによる日本大使公邸占拠事件が有名だが、その後ここは更地にされ、公邸は別の場所に新築されていた。ペルーの治安の悪さは相変わらずで、どこに行くのも車で、しかもボディガードを伴うという窮屈な生活を強いられていた。ボディガードのA君は、おいおい大丈夫かと思うほど、屈強な体躯とはかけ離れた華奢な男だったが、これがなかなかの歴史通である。一度A君と世間話をしたときのこと、「私の歴史上のヒーローはサブロー・サカイです」と言うではないか。あの著書『大空のサムライ』でおなじみのゼロ戦パイロット、故・坂井三郎氏のことである。評伝によると賛否両論ある人ようだが、それはともかく、坂井氏の話をしているときは、いつもは無愛想なボディガードが嬉しそうに笑っていた。ヒーローといえば、以前ブルガリアに在勤していたときのことも思い出す。筆者が住んでいたアパートの駐車場で門番を務めていたのは、ソフィアの研修医だった。研修医の月収は百ドルにも満たなかったので、夜間に門番のアルバイトをして糊口を凌いでいたのである。この若きアルバイト生は番小屋でよく本を読んでいたの、何を読んでいるのか尋ねてみたら、医学書ではなく『太閤記』のブルガリア語版を読んでいた。彼が片言の英語で「僕のヒーローはヒデオシだ」と言ったのは、立志伝中の人物を自分の境遇と重ね合わせていたのだろうか。

さて、本題に入る。ペルーの首都リマは海拔ゼロメートル地帯にあるが、“空中都市”ともいわれるマチュピチュは2400メートル、マチュピチュへの出発点となるかつてのインカ帝国の首都クスコは3400メートルの高地にある。マチュピチュは日本人が行ってみたい世界の観光地のトップにランクされる人気スポットでもある。筆者がペルーに転勤した2003年のある日、クスコで日本人団体観光客を乗せたバスが横転し、20余名の乗客が重軽傷を負ったという連絡が飛び込んできた。筆者はすぐ領事に連絡し、「助けに行こう」と声をかけた。と同時に、いつも世話になっているペルー日系人協会診療所<sup>1)</sup>の日本語堪能な医師にも同行を頼み、われわれはその日の午後の国内線でクスコへ飛んだ。リマからクスコは空路1時間の距離だ。短時間のうちに海拔高度を3000メートル以上も上げることになる。クスコの空港に着いて荷物が出てくるのを待っている間に、筆者は早くも息苦しさや嘔気に襲われた。しまった、高山病だ。しかし、怪我人がわれわれを待っている。休む間もなく、われわれは旅行者一行が収容されている病院へ急行した。

高山病といえば、筆者はペルーの隣国エクアドルも担当していたので、年に3回ほど首都のキト(写真1)へ出張していたが、毎回高山病に悩まされていた<sup>2)</sup>。ヒトの高地順応度は老若男女によらず個々の体質によって様々である。リマからの同行者たちはクスコに着いても生き生きとしていたが、筆者は低酸素に弱い体質のようだ。以前リマにあるサンマルコス大学医学部を訪れたとき、この大学では高山病と体質の関連性について研究しているという話を聞いた。あのときもっと詳しく聞いておけばよかったと思っ



写真1 エクアドルの首都キトにて  
海拔3000メートルの表示を示す筆者

だが、クスコに着いた今となっては後の祭りだ。筆者はリマで、高山病の発症予防に有効であるといわれている緑内障治療薬アセタゾラミド（ダイアモックス<sup>®</sup>錠250mg）を内服してクスコへ向かったのだが、強行軍では薬効も望めない。

余談だが、クスコのホテルのロビーにはココ茶が置かれている。一見すると普通の紅茶を入れたティーポットのようなのだが、待て！これはコカインの原料となるコカの葉で入れたお茶だ。ペルーでは合法的にコカの葉を栽培している農家があり、堂々とココ茶のティーバッグが売られている。外箱には、ココ茶の効能として“体組織の酸素化を促す”と書いてあるが、コカインは麻薬だ。インターネット上でもココ茶を試飲したという書き込みがみられるが、お茶程度の低濃度といえども決して手を伸ばしてはいけない。日本に持ち帰るなどあってはならない。

旅行者一行が収容されている病院やホテルで全員の安否確認を行うと、幸いなことに死亡者はいない。病院では院長とともに一行を回診し、患者ごとに細かい指示を行ったが、すべての患者を診察し終わった頃には、もう夜になっていた。そこで我に返ると筆者は強烈な息苦しさを覚え、その場に座り込んでしまった。「酸素をくれ」と院長にお願いし、空いている病室で経鼻酸素投与を受ける羽目になってしまったのだ（写真2）。酸素の効果は体験済みだ。実はエクアドルに出張したときも、高山病で倒れるように宿に戻り、フロントで助けを求めたら酸素ボンベが出てきたことがある。患者の安否確認の次は緊



写真2 ペルーのクスコで酸素投与を受ける筆者



写真3 ペルー日系人協会への協力が認められ表彰を受ける筆者（2005年）

急移送だ。筆者らは航空会社とも協議しながら、一行を2日に分けて空路でリマに下山させ、首都圏の病院に再入院させた。最終的に一名も失うことなく一行全員を帰国させることができたのは、ペルー日系人協会（写真3）をはじめ現地医療関係者のおかげだった。ほっとする間もなく、さあ次はエクアドル出張だ。今度もまた高山病で苦しむことになるのだろうか。（つづく）

## 文 献

- 1) 吉田定信、ボニジャ、J. ペルー日系人協会の医療活動～日秘総合診療所の歩み～. 日本医事新報. 2004; 4172: 39-42
- 2) 吉田定信. 中南米各地における高山病の体験談. 日本医事新報. 2005; 4247: 73-76

本稿は個人の見解に基づくものです。